

蓮見雄（立正大学経済学部）

大西洋統合と欧州近隣諸国政策  
「地政学」と「間主観性」の示唆

1. 成果

欧州近隣諸国は、統合のプロセスとしての EU が、グローバル・アクターとしての EU に  
出会うアリーナである。そして、少なくとも欧州委員会側から見る限り、欧州近隣諸国政  
策（ENP）は、EU のソフト・パワーあるいは規範のパワー（normative power）を体現した  
政策である。しかし、そのアリーナは、ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国の政策の対立・  
収斂という競争の要素をはらんでおり、EU・NATO の分業の再編という課題は ENP および  
ソフト・パワーとしての EU の成否と密接に関連している（例として：西バルカンでの収斂、  
中東での乖離）。

そこで本報告では、まず大西洋統合の経済的・制度的基礎を確認した上で、ヨーロッパ  
における重層的なパワー構造とその内部における国家のポジショニング選択の解明を試み  
た配置理論（constellation）を紹介し、次いで、「多元的開放型リージョナル・ガバナンス」  
という概念及び地政学とジオストラテジーの組み合わせによって、時に包摂的、時に排他  
的な EU の対外行動を説明しうることを示した。

2. 課題

しかし、こうした理論モデルはいずれも、アウトサイダーが、いかにして大西洋統合側  
の課すコンディショナリティ（ヨーロッパ化）を変容させながら自発的に受容していくか、  
というプロセスを分析対象から除外するという陥穽に陥っている。言い換えれば、これら  
の理論モデルは、EU がソフト・パワーとして振る舞おうとしていることが、その実現の必  
要条件にすぎず、十分条件ではない、という点を見落としている。

ソフト・パワー、規範のパワーとしての EU の試金石となるのが、人と人との交流を重視  
したボトムアップ・アプローチに基づく欧州近隣諸国パートナーシップ・クロスボーダー・  
コーペレーション（ENPI-CBC）である。だが、先述のようなパワーの極の側からのアプ  
ローチだけでは、EU の域外ボーダー・リージョンにおけるソーシャル・キャピタルの生成プ  
ロセスを分析することはできない。

この陥穽を克服するには、間主観性（Intersubjectivity）という分析視角を導入し、日常生活  
を通じて価値の共有が生成されるプロセスとして、つまり「社会生成の現場（the Fabric of  
Social Becoming）」として ENPI-CBC の事例研究とその比較を行う必要がある。